

キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘（2015年秋期）調査出土遺物の研究 ——土器・瓦編——

城倉正祥・山藤正敏・ナワビ矢麻・伝田郁夫・山内和也・
バキット アマンバエヴァ

Archaeological Researches on Artifacts from the Excavation at Ak-Beshim Site, the 2015 Autumn Season: Pottery and Roof tiles

Masayoshi JOKURA, Masatoshi YAMAFUJI, Yama NAWABI, Ikuo DENDA, Kazuya YAMAUCHI,
Bakyt AMANBAEVA

Abstract

The present paper focuses on the pottery assemblages from the Shakhristan and the roof tiles recovered in the Rabat of Ak Beshim during the 2015 seasons, to corroborate the chronological framework in the last volume and discern the technological characteristics.

A tentative chronology is submitted through a comparative study of pottery assemblages between the Rabat and the Shakhristan of Ak Beshim. In view of wares, form compositions and types the pottery assemblages from Strata II and III at the Rabat could be comparable with the late Stratum I at the Shakhristan, dated around the tenth to the eleventh centuries AD. Therefore, it is assumed that the early Stratum I at the Shakhristan preceded Stratum III at the Rabat. The result indicates that the Rabat had been occupied until the late Kala Khanid period at the latest.

An analysis of the roof tiles from the Rabat reveals some chronological implications and technological features. Those consist of the excavated ones from Stratum IV in the Trench 1 at the Rabat and the collected ones on the surface. Based on 3D recording and digital photography as well as observations through the naked eyes, various production techniques were recognized, some of which could have originated from China, though the highly standardized products imply a limited period of use.

Conclusive dating and cultural tradition of Stratum IV at the Rabat will be discussed in the final report.

はじめに

アク・ベシム遺跡は、キルギス共和国チュー川流域に位置する都市遺跡である。2015年秋期には、唐碎葉城の可能性が考えられるラバト中枢部の発掘調査を実施し、その成果と出土遺物の報告を Rilas Journal 紙上で発表してきた（城倉ほか 2016・2017）。本論は、2017年夏に実施した土器・瓦の整理成果の概要報告である。

1. 調査の体制と経過

1-1 調査の体制

調査の体制は、以下の通りである。

【代表者】山内和也（帝京大学文化財研究所）、バキット・アマンバエヴァ（Institute of History and Cultural Heritage, National Academy of Sciences, Kyrgyz Republic）。

【担当者】城倉正祥（早稲田大学文学学術院）、山藤正敏（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）。

【参加者】ナワビ矢麻（早稲田大学會津八一記念博物館）、伝田郁夫（早稲田大学大学院文学研究科）。

【協力者】ヴァレリー・コルチェンコ（Institute of History and Cultural Heritage, National Academy of Sciences, Kyrgyz Republic）、横山真・千葉史（株式会社ラング）。

なお、本論は調査代表者である山内・アマンバエヴァの指導の下、整理作業を担当した城倉・山藤が中心となって作成した。現地の整理作業では、土器の実測を山藤、瓦の三次元計測を城倉・伝田、遺物の写真撮影をナワビが行った。また、各自の執筆・図版作成分担は、本文末および図表出典一覧に明記した。文章・図版の統一、および全体の編集は城倉が行った。

1-2 調査の経過

調査の経過は、以下の通りである。

【2017.8.10】城倉・山藤・ナワビ・伝田が日本出国。仁川・アルマトイ経由でビシュケクへ。整理作業基地となるリッチホテルへ投宿。

【2017.8.11】AM：国立科学アカデミーへ赴き、アマンバエヴァと打ち合わせ。その後、2015年秋期の発掘調査で出土した土器・瓦等の遺物および整理作業用の機材一式をリッチホテルへ搬入。PM：地階会議室に整理作業スペースを構築。山藤は土器の接合・分類作業を開始。城倉・ナワビ・伝田は、瓦の観察表の記載項目、撮影方向や細部の撮影箇所等、資料化の方法を検討した後、再度、破片資料の接合関係に遺漏がないかをチェック。会議室内に写場を設置し、EXAscanによる三次元計測と写真撮影を開始。

【2017.8.12】終日：各自、前日と同じ作業を継続。

【2017.8.13】終日：山藤は土器の分析作業を開始。城倉・ナワビ・伝田は前日と同じ作業を継続。瓦の俯瞰写真撮影が終了。城倉・ナワビを中心に、瓦の製作技術に関する観察をまとめる。

【2017.8.14～8.17】終日：各自、担当作業を継続。17日までに、山藤は土器の分析・実測、城倉・ナワビ・伝田は瓦の三次元計測、ナワビは土器および瓦の立面・細部等の写真撮影を終了。

【2017.8.18】AM：作業終了者から、順次、土器および瓦の梱包作業を開始。遺物・機材の整理。PM：秋期および次年度以降の調査、整理作業および概報・報告書の作成に向けた方針を打ち合わせる。

【2017.8.19】AM：アカデミーに遺物および機材を返却。アマンバエヴァと打ち合わせ。その後、トクマクへ移動。PM：ヴァレリーの案内のもと、アク・ベシム遺跡の発掘現場を見学。

【2017.8.20】AM：機材および各自の荷物等の整理。PM：城倉・山藤・ナワビ・伝田がアルマトイ・仁川経由で日本へ。翌日午後日本到着。調査の全行程終了。

2. シャフリスタン出土土器との比較分析

2-1 概要

本章では、前号において検討したラバト地区出土土器群の編年的・文化的位置付けをより明確にするために、2015年夏にシャフリスタン地区から出土した土器群を分析し、ラバト地区第Ⅱ・Ⅲ層出土土器と比較する。

シャフリスタン地区はアク・ベシム遺跡の西半分に位置する城塞都市であり、四方に周壁が廻る（[図1](#)）。その利用は5世紀にまで遡ると考えられている。同地区での発掘調査は以前より断続的に行われてきたが、今日継続している発掘調査は2012～2014年の東京文化財研究所による研修事業を端緒としている（[山内・アマンバエヴァ編2016](#)）。2015年6～7月には、科学研究費補助金により学術調査が本格的に開始され、今日に至る。

日本隊によるシャフリスタン地区の調査区は東西30m、南北20mの規模を測り、南城門と考えられる城壁の凹部から北に約100mに位置し、南北に延びる目抜き通りを横断するかたちで配置された。発掘調査は、2012～2015年までは東京文化財研究所により、2016年以降は帝京大学により行われている。2012～2014年までの東京文化財研究所による研修発掘の結果、表土直下の最上層（第Ⅰ層）上層からは複数の住居跡（ユニット）が検出され、出土した土器の型式的特徴に鑑みて、当該層はカラハン朝時代に比定される。また、2012年9月に第Ⅰ層上層の街路跡と建物群から採集された木炭5点の放射性炭素14の測定値は10世紀頃（カラハン朝時代）を示しており、上記の見解と一致する（[山内・アマンバエヴァ編2016](#)）。

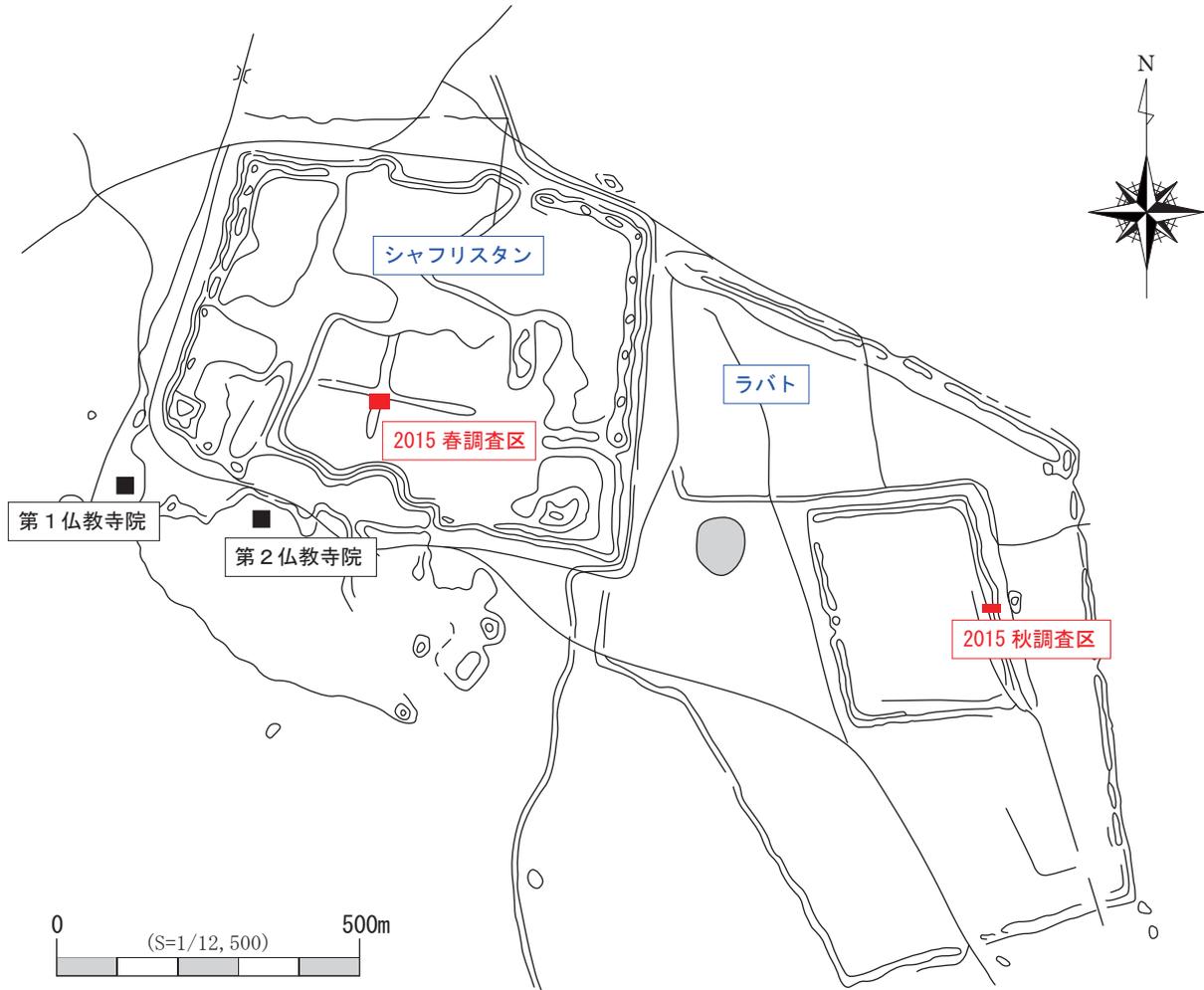


図1 アク・ベシム遺跡 2015年調査区の位置

本章で分析対象とするのは、2015年夏に東京文化財研究所が行なった発掘調査において出土した土器群である。同発掘調査では、当該地区の第I層下層の様相が明らかになった。2012～2014年の発掘調査により、第I層では複数のユニットが検出されたが（山内・アマンバエヴァ編2016：図4・9）が、2015年夏には、これらのユニットの下層の状況を探るため、既に検出されていた上層床面を掘削した。結果として、下層の床面及び床面構築時の整地を検出し、そこから多量の出土遺物が得られた。

本章では、出土位置が良好な170点の土器片を抽出し、土器群及び器種・型式について分析を行う（床面・床面から掘りこまれた同時期の土坑出土土器片のみを対象とする）。これらの土器片は、ユニット1・4・5・6からの出土土器である。

2-2 土器群と出土傾向

前号において、ラバト地区から出土した64点について、その調整技法や胎土の特徴に基づき、9つの土器群を設定した（城倉ほか2017）。シャフリスタン地区出土土器についても同様の基準に従い分類を実施したが、前号での分類に収まらない土器群を少なからず確認した。そこで、これらの土器群について新たに定義を示し、その後、土器群全体の出土傾向について論じることとする。

シャフリスタン地区出土土器の実見により、以下に示す5群を追加する。

【1群】 ロクロ成形で胎土が普通から精良である1a～1d群に加えて、今回新たにロクロ成形あるいは手捏ねで胎土が比較的粗い2群を区別する。1e群は外面にナデが施され、胎土に大きめの砂粒が多く混和される。

表1 シャフリスタン 2015 出土土器群のユニット別出土傾向

グリッド	ユニット	出土位置	種別	土器群																		
				1a	1b	1c	1d	1e	1f	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
A1	1	217	床面	2	1	1																
A1	1	218	床面	2	1	1	1			1				2								
A1	1	210	土坑	8	5	5	1	2	2					6							1	1
A3	4	208	床面	3	4		1															
A3	4	210	床面	1	1	1	1															
A3	4	222	整地	1	11	3	3						9							1	1	
A3	4	221	整地	9	5	14	4						4									1
B3	5	101	床面	2	1	2	1		1													
B3	5	115	床面	3	5	4	2	2						2							1	
B2	6	103	床面		1	1								9							1	1
B2	6	107	スーファ											9								
総計				31	35	32	14	4	3	1	0	0	0	41	0	0	0	3	3	3		

表2 シャフリスタン 2015 出土土器の器種別出土傾向

グリッド	ユニット	出土位置	種別	鉢	カップ	大型甕壺	壺	水差し	調理用甕	蓋	環状把手片	注口片	平底片	高台片
A1	1	217	床面					2						1
A1	1	218	床面			1	2	2	1					1
A1	1	210	土坑	1				2	5	3	7			9
A3	4	208	床面					2			4			2
A3	4	210	床面		1						2			1
A3	4	222	整地	4	2		6	1	4	3	2	1	5	1
A3	4	221	整地			1		5	4	1	4		18	1
B3	5	101	床面		1	1	1	1						4
B3	5	115	床面		2	4	1	2	3		1	1	5	
B2	6	103	床面	1					8					4
B2	6	107	スーファ						9					
総計				6	7	8	8	17	34	7	20	2	50	2

計4点。1f群は、外面にナデあるいはケズリが施された後に白色ウォッシュが塗布される。胎土には大きめの砂粒が多く混和される。計3点。

【10群】赤橙色を呈する手捏ねの土器である。胎土の質感は普通であり、外面にはナデとケズリが施され、時折、赤色スリップが塗布される。少量の砂粒が混和される。計3点。

【11群】鈍い橙色を呈するロクロ成形の普通から粗製の土器である。時折、外面にケズリと白色ウォッシュが施される。計3点。

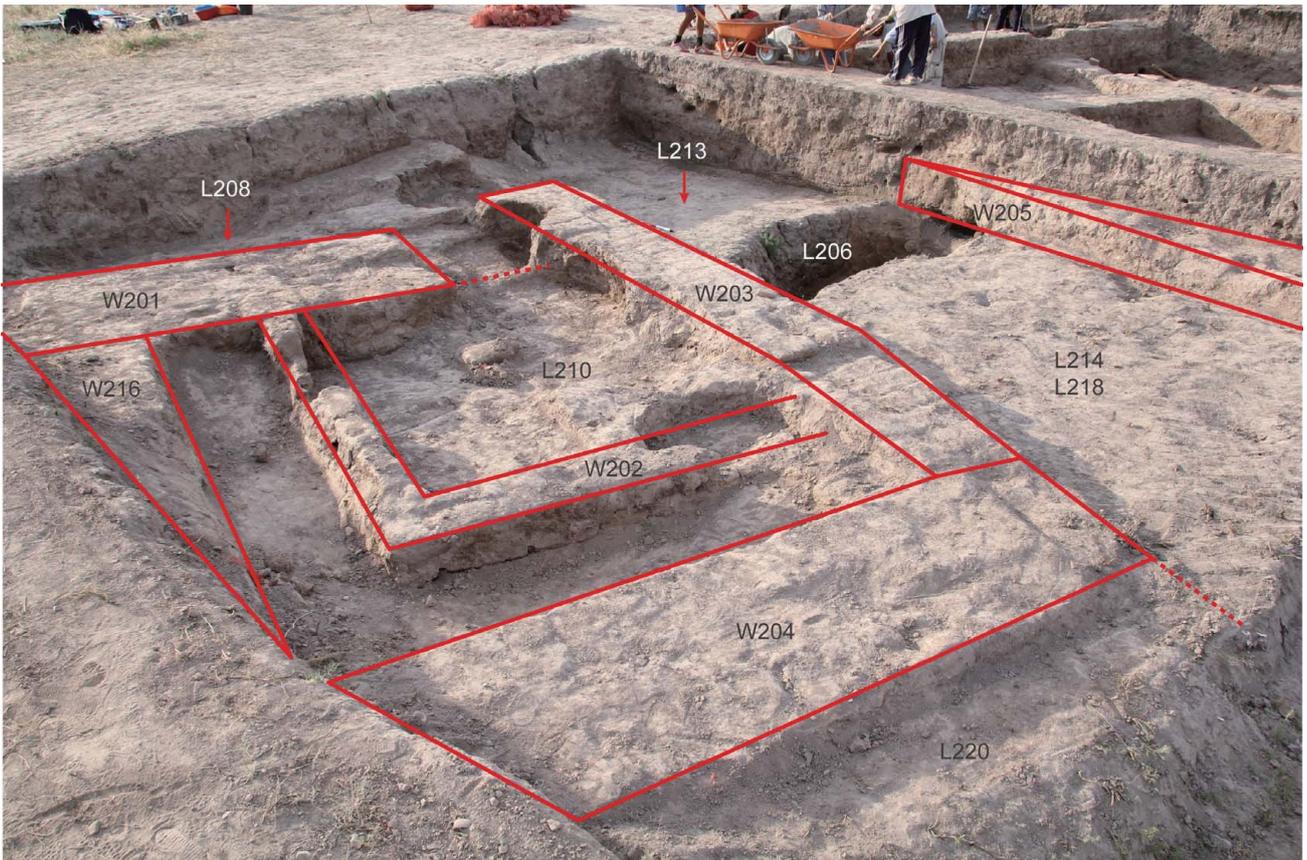
【12群】灰鈍い橙色を呈する手捏ねの粗製土器である。多量の砂粒が混和されており、鈍重な印象である。外面にはナデとケズリが施される。計3点。

次に、土器群全体の出土傾向を、対象ユニット別に定量分析が可能であった出土位置 (Loc) 別に見ていく (表1)。調査区北西部のユニット1の床面 (L217&218) と土坑 (L210) からは、計43点の土器片が出土した。これまでの基本的な傾向と同様、1群が大多数を占めている。特に、1a・1b群が19点と最も多く、1c・1d群が9点とこれに次ぐ。また、調理用と考えられる6群が8点認められる。この他には、顕著な傾向は認められない。なお、出土土器の多くは床面検出の土坑 (L210) から出土した。

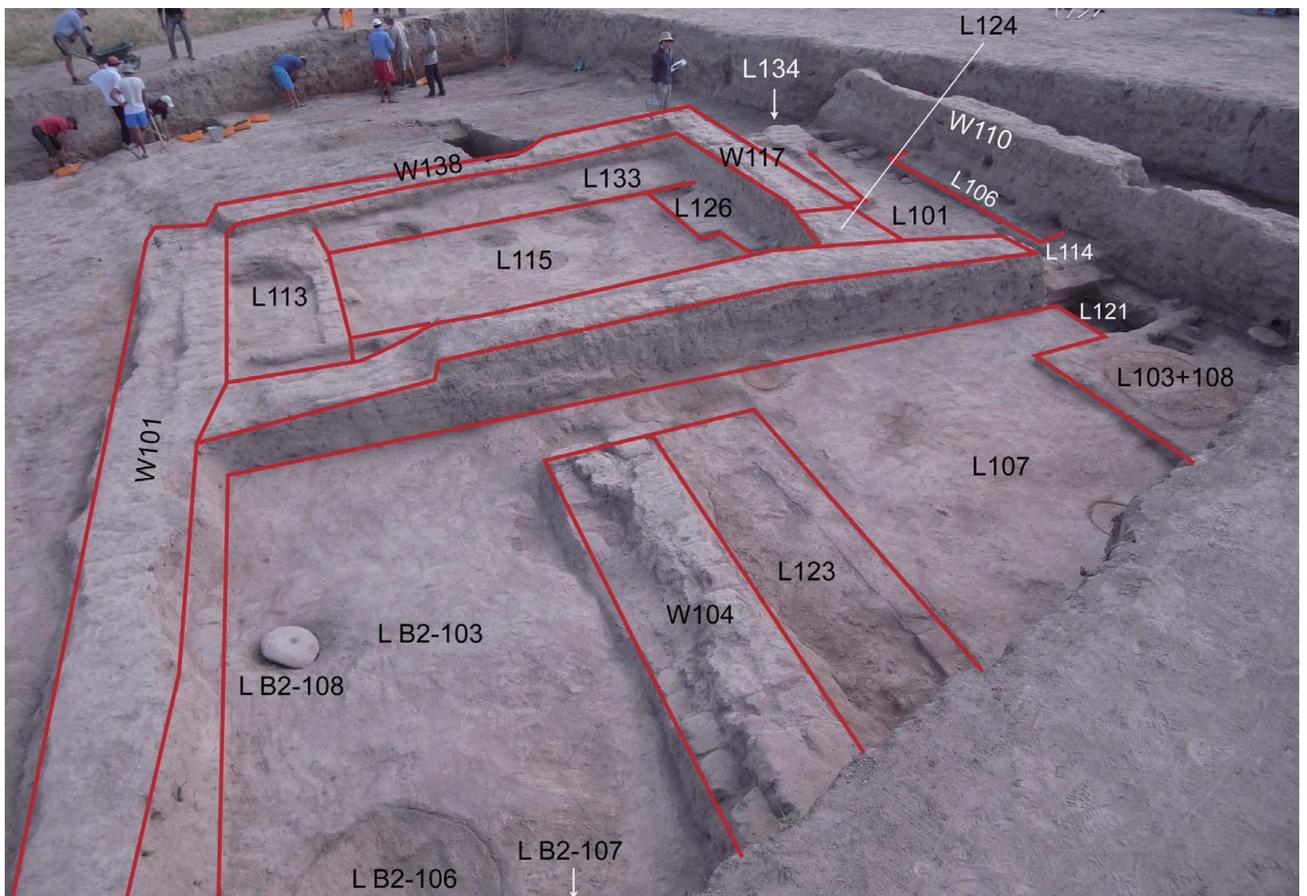
調査区北東部のユニット4の床面 (L208) からは計12点の土器片が出土した (図2a)。いずれも1群であり、なかでも1a・1b群が大多数 (9点) を占める。また、ユニット4の床面 (L210) 構築時の整地と思しき堆積 (L221&222) からは、計66点の土器片が出土した。このうち1群が50点を占めており、特に、1c群は17点と最多である。この他、6群が13点出土している。

調査区南東部のユニット5の床面 (L101&115) からは計26点の土器片が出土した (図2b)。このユニットでもまた、1群の土器が大多数を占めており、特に1a~1cが目立つ。この他には顕著な傾向は見出せない。

同じく調査区南東部でユニット5南辺に隣接するユニット6の床面 (L103&107) からは、計23点の土器片が出土した (図2b)。このユニットでは、6群が18点と大多数を占めており、他にない傾向が見られた。しかし、導線に鑑みて、北のユニット5と一連の建物として機能していた可能性が高く、上記の傾向は空間の機能差を示しているものと捉えられるだろう。



a. ユニット4 遺物出土位置（西から）



b. ユニット5・6 遺物出土位置（南西から）

図2 ユニット4~6の遺物出土位置

以上から、2つの点が明らかになった。まず、概して1群の存在が顕著であり、特に、1a～1c群の出土が目立つということである。これは、シャフリスタン地区第I層下層において、1群が基本的な土器群であることを示している。また、一部のユニットを除いて、6群が一定数認められた。ユニット4床面(L208&210)では6群は認められなかったが、ユニット4構築時の整地(L221&222)からはやはり同群が一定数出土したことに鑑みて、ユニット4床面における6群の不在は機能差によるものと考えられる。したがって、6群の存在もまた、当該文化層を特徴づける土器群と言えるだろう。なお、補足しておく、ユニット4構築時の整地は、その直前の住居に由来する土壌(日干レンガの壁体・スーファ、カマド、その他床面堆積物等)を用いて造成されたと考えられる。このため、構築時の整地はその上に貼られた床面に比べて一つ前の時期の遺物(土器)を含むと考えられるので、整地出土土器群は、厳密に言えば、床面出土土器群と並立して論じられるべきではない。とはいえ、正確な時間差が不明であるものの、整地出土土器の性質・型式に鑑みて、床面出土のものと同じ文化的コンテクストに属すると判断できることから、本章では両者の時間差がほとんど無いものと見做している。

2-3 器種別出土傾向

次に、土器の器種別に出土傾向を見ていく。ここでは、器種の全く不明な胴部片を除く161点を対象とする。なお、対象資料中、数点の土器片については、土器群が未設定であった2015年夏に作成した実測図を分析に供したため、土器群が不明である。以下の分析では、有意な傾向の把握を容易にするために、細かい型式設定は行わず、以下の簡易な器種(部位)分類を用いる。

【鉢】口縁部周辺で最大径をとる。口径の方が器高よりも数値が大きい。

【カップ】口径10cm未満、器高15cm未満程度の朝顔形を呈する薄手の精製土器。ロクロ成形。胴体下部から底部近くに屈曲を有する。胴体下半に環状把手が1つ取り付く。

【大型甕/壺】かなり厚手で通常から粗製の大型土器。

【壺】口径20cm未満程度の小～中型土器。ロクロ成形。時折、一對の環状把手が肩部から胴体上半に取り付く。

【調理用甕】粗製の無頸壺。外面は煤に覆われていることが多い。

【水差し】口縁部に片口が付く、あるいは、肩部に長い注口が取り付く、胎土が通常から精製の細頸壺。ロクロ成形。口縁部から肩部にかけて、1ないし2つの環状把手が取り付くことが多い。

【蓋】直径20～30cm程度のやや粗製の蓋。上面中央には高さ3cm程度の取手を取り付く。上面はナデにより調整され、刻文により装飾される。下面は未調整のものが多い。部分的に煤が付着する物がほとんどである。

上記の器種が明確な破片以外については、以下に分類できる。

【環状把手片】由来が不明な環状把手をまとめた。

【注口片】由来が不明な注口片をまとめた。

【平底片】おそらく壺、水差し、調理用甕いずれかの底部片と思われる。

【高台片】由来が不明な底部片。

次に、上記器種の出土傾向を、上述の土器群と同様に対象ユニット及び出土コンテクスト別に見ていく(表2)。ユニット1床面(L217&218)では、水差しが4点と最多であり、大型甕/壺が2点とこれに次ぐ。ユニット1土坑(L210)からは、明確な器種としては調理用甕が5点出土しており、顕著である。器種不明な破片は、環状把手と平底片が多く出土しており、水差しの存在を示唆している。一方、鉢とカップは各1点しか見つかっていない。

ユニット4床面(L208&210)からは、僅かに3点の明確な器種(水差し2点とカップ1点)が認められたのみである。器種不明な破片は、環状把手が6点及び平底片が3点出土しており、水差しのさらなる存在を示唆している。ユニット4構築時の整地(L221&222)からは、全ての器種が認められる。とりわけ、調理用甕が9点と最も多く、壺と水差しが各6点認められる。また、器種不明な破片として、平底片が23点も

認められていることから、本来はより多くの壺が存在した可能性も否定できない。なお、鉢とカップは合わせて6点しか出土していない。

ユニット5床面（L101&115）からは、大型甕／壺が多く認められる。また、器種不明確な破片では平底片が9点出土しており、2点しか出土していない壺が実際にはより多かった可能性がある。この他、カップが3点認められる点は、他のユニットとは異なる傾向である。南隣するユニット6（グリッドB2）床面（L103）及びスーファ（L107）では、調理用甕が圧倒的多数を占めている。これ以外の器種として、大型の鉢が1点出土した。先述のとおり、このユニットはユニット5と一連の建物と認識できるため、両者を合わせて傾向を見る必要がある。

以上、ユニット別にやや異なる傾向は見られるものの、いくつかの共通する傾向を確認することができた。1つは、いずれのユニットでも大型甕／壺、壺、水差しが多数を占めていることである。また、これとは逆に、鉢とカップは常に少数しか認められず、鉢は大型あるいは中型に限られる。さらに、土器群の分析でも見たとおり、6群と一致する調理用甕は、常に一定数が認められる。こうした共通点は、当該期の器種組成の特徴を示しているものと思われる。

2-4 ユニット別出土土器

上記で示した出土土器のうち、形態を復元できるか特徴的な土器を図3、及び表3に示す。以下では、これらの型式的特徴に着目して、ユニット別に出土土器について詳述する。

1・2は、ユニット1出土土器である。1は1a群に属する大型甕の口縁部片である。器壁は分厚いがロクロ成形であり、胎土は普通から精良である。口縁部は外反し肥厚する。また、口縁外面下部には隆帯が廻る。頸部外面にはロクロナデの上から右肩上がりナデが、また、その下部には左肩上がりナデの磨研が連続して施されている。内面は、ロクロナデの後に研磨が施されたようで、僅かな光沢を放つ。復元口径200～220mm。2は6群に属する調理用甕である。粘土紐により成形され、胎土は粗製から普通を呈し、外面には煤痕が見られる。口縁部は強く内彎したのち上方に僅かに屈曲する。やや強く張り出した肩部には、顕著な押捺を伴うための隆帯が貼付されている。内外面共に、やや粗い水平ナデ施される。復元口径176～192mm。

3～7はユニット4構築時の整地からの出土土器である。3は6群に属する粗製の中型鉢である。粘土紐により成形される。口縁部はやや内彎し、口縁端部は、やや丸みを帯びた平坦面を成す。口縁部外面には連続的な水平ナデが施される。胴部外面は部分的に荒れてはいるものの、左肩上がり及び水平方向のナデの痕跡が認められる。一方、内面には指押さえの痕跡が多数残る。復元口径236mm。4は1a群に属する環状把手付き短頸壺である。ロクロ成形であるが、胴部上半で接合痕が認められることから、部分を成形後、最終的に一体に接合したと考えられる。口縁部はやや強く外反し、断面三角形を呈する。頸部から肩部にかけて環状把手が取り付け付く。破片資料のため現況では把手は1つのみしか残存していないが、元来は対称位置に1対が取り付けられていたと思われる。なお、把手上面にはボタン状の円板が装飾的意匠として貼付される。頸部と肩部の境界付近の外面には、3条の水平沈線が平行に廻る。外面上半にはセルフ・スリップの後にロクロナデが、また、内面上半にはロクロナデの痕跡が認められる。復元口径178mm。5は1d群の柱状注口付き水差しである。ロクロ成形で、胎土は普通から精良である。口縁部は頸部からやや外反気味に直立し、端部が内側に僅かに屈曲する。口縁上面は平坦面をなす。注口は肩部に取り付けられており、頸部側上部が口縁部下に取り付くため、あたかも環状把手のような外観を呈する。注口端部は欠損しているが、元来は片口状に突出していたと思われる。内外面共にロクロナデが施されるが、肩部外面にはその上から水平方向の磨研が施されている。また、肩部には、同心円と三角形から成る帯状の刻文が廻っている。復元口径110mm。6は12群の高台片である。胎土は粗く、器壁も厚い。高台端部は肥厚し、外面に連続押捺による装飾が施される。外面には水平ナデ及び水平方向のケズリが施され、内面（底面）には不規則なナデが見られる。復元底部径156mm。7は1d群のカップである。この資料は、ユニット4南の東西街路の整地より出土したが、ユニット4の整地と同時期に整備されたと解釈し、ここに記載する。ロクロ成形であり、胎土は精良である。口縁部は欠損しており、環状把手が1つ取り付け付いた胴部から胴部の破片資料である。内外両面にロクロナデが見られ、外面底部にはケズリが施

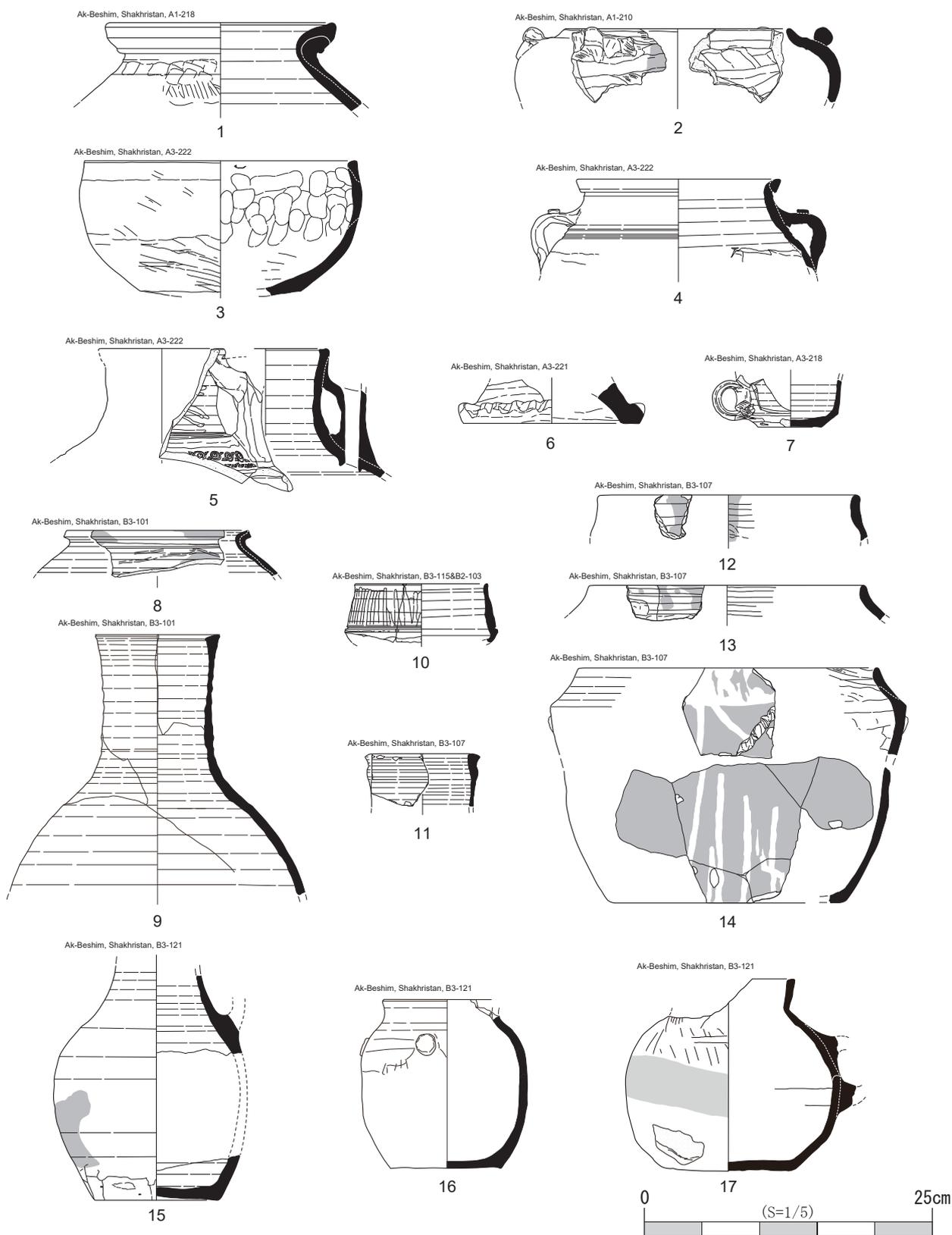


図3 ユニット別の出土土器

される。また、内面底面には煤痕が残る。底面径 56mm。

8~10はユニット5出土土器である。8は1a群の短頸壺である。ロクロ成形で、胎土は精良である。口縁部は外反し、端部はやや凹面を呈して斜めに面取りされる。内外面にはロクロナデが施される。外面には部分的に煤痕が残る。復元口径 162mm。9はおそらく1a群のやや大型の水差しである。ロクロ成形で、胎土は普

表3 ユニット別出土土器（図3）の諸属性

図版番号	出土位置	器種	口径 (底部径)	土器群	質感	色調	混和物	器面装飾
3:1	A1-218	大型甕	200-220	1a	普通～精良	内面: 2.5YR6/8 外面: 2.5YR6/6 断面: 2.5YR6/8	0.5-1.0 mm径の灰色粒(砂粒)少量、0.5-1.0 mm径の長石少量	-
3:2	A1-210	調理用甕	176-192	6	粗～普通	内面: 5YR7/4 外面: 2.5YR7/4 断面: 5YR6/4	1.0-3.0 mm径の砂粒多量、1.0-3.0 mm径の長石少量	外面に白色ウォッシュ(10YR8/3)
3:3	A3-222	中型鉢	236	6	粗	内面: 2.5YR6/6 外面: 2.5YR6/6 断面: 2.5YR6/6&7.5YR7/4	1.0-3.0 mm径の砂粒極めて多量、1.0 mm径の長石/方解石多量、小径雲母少量	口縁部が白色(セルフ・スリッパが?、10YR8/3)
3:4	A3-222	環状把手付き短頸壺	178	1a	普通～精良	内面: 2.5YR6/8 外面: 5YR6/6 断面: 2.5YR7/8	0.5 mm未満径の方解石及び黒色粒少量、1.0 mm径の白色粒(長石)及び黒色粒少量	胴部上半外面にセルフ・スリッパ(5YR7/6)
3:5	A3-222	柱状注口付き水指し	110	1d	普通～精良	内面: 5YR7/6 外面: 2.5YR6/6 断面: 2.5YR6/6	0.5-1.0 mm径の長石少量、0.5-1.0 mm径の砂粒極少量	外面に白色ウォッシュ(7.5YR7/3)、肩部外面に押捺装飾帯
3:6	A3-221	高台	156	12	粗	内面: 7.5YR6/3 外面: 7.5YR7/4 断面: 10YR4/1	1.0-2.0 mm径の砂粒やや多量	底部外面に連続的な押捺を伴う。底部に白色ウォッシュ(10YR7/2)?
3:7	A3-218	カップ	56	1d	精良	内面: 5YR6/6 外面: 5YR6/6 断面: 5YR6/6	0.5 mm未満径の長石及び小径雲母極少量	外面に白色ウォッシュ(10YR8/3)
3:8	B3-101	短頸壺	162	1a	精良	内面: 7.5YR7/4 外面: 7.5YR7/6 断面: 5YR6/6	0.5-1.0 mm径の褐色(長石?)及び黒色粒少量、0.5-1.0 mm径の雲母極少量	-
3:9	B3-101	水差し	108	1a	普通	内面: 2.5YR6/6 外面: 2.5YR6/6 断面: 10R5/6	0.5-1.5 mm径の灰色粒多量、0.5-2.0 mm径の白色粒(方解石)少量	-
3:10	B3-115, B2-103	カップ	116	1d	精良	内面: 2.5YR6/8 外面: 2.5YR6/8 断面: 2.5YR5/6	1.0 mm径の砂粒多量、1.0 mm未満径の長石少量、1.0 mm未満径の雲母極少量	外面に白色ウォッシュ(10YR8/3-10YR7/3)
3:11	B3-107	水差し	100	1b	精良	内面: 2.5YR6/8 外面: 2.5YR6/6 断面: 2.5YR6/4	0.5-1.0 mm径の灰色粒少量、雲母少量	外面に白色ウォッシュ(7.5YR7/4)
3:12	B3-107	調理用甕	204	6	粗	内面: 5YR6/6 外面: 2.5YR8/2~2.5Y7/2 断面: 2.5YR5/6	0.5 mm径の灰色粒多量	-
3:13	B3-107	調理用甕	238	6	普通	内面: 5YR6/4 外面: 10YR7/2 断面: 2.5Y6/1	0.5-1.0 mm径の灰色粒多量、0.5-5.5 mm径の白色粒少量、雲母及び石英数片	-
3:14	B3-107	調理用甕	260	6	普通	内面: 2.5YR6/8 外面: 2.5YR6/8 断面: 2.5YR5/6	1 mm径の方解石多量、1 mm径の灰色粒少量、1 mm径の雲母及び石英数片	外面に白色線文(2.5Y8/3)
3:15	B3-121	水差し	107(底部径)	1d(?)	普通～精良	内面: 2.5YR5/8 外面: 2.5YR6/6 断面: 2.5YR6/8	0.5-1.0 mm径の長石(?)少量、0.5 mm未満径の小径雲母極少量	胴部上半外面に部分的に白色スリッパ(10YR8/4)?
3:16	B3-121	調理用甕	112	6	粗～普通	内面: 2.5YR5/8 外面: 2.5YR6/6 断面: 2.5YR6/9	0.5-1.0 mm径の黒色及び灰色粒が極めて多量	-
3:17	B3-121	調理用甕	116	6	粗～普通	内面: 5YR7/4 外面: 5YR7/4 断面: 7.5YR5/4	0.5-1.0 mm径の白色粒(方解石)多量、0.5-1.0 mm径の灰色粒少量	-

通である。口縁部はほぼ直立し、口縁端部は肥厚のうえやや内傾して面取りされる。内外面にはロクロナデが施される。復元口径は108mm。10は1d群のカップである。ロクロ成形で、胎土は精良である。口縁部はやや内傾して伸び、口縁端部近くでわずかに外反して丸く収まる。胴部は顕著に屈曲し、屈曲部直上には水平沈線が1条廻る。内外面にはロクロナデが施され、口縁部外面には白色ウォッシュ塗布後に垂直磨研が連続的に施される。復元口径116mm。

11~14はユニット6床面出土土器である。11はおそらく1b群の水差しの口縁部片である。ロクロ成形で、胎土は精良である。内外面共にロクロナデが施される。外面には白色ウォッシュが塗布される。復元口径100mm。12~14は6群の調理用甕である。いずれも粘土紐による成形後に回転台により整形されており、胎土は粗製から普通である。肩部が屈曲し、口縁部は内傾してから上方に彎曲する。内外面には水平方向のナデが連続的に施される。外面には煤痕が付着するが、12には内面にも煤痕が見られる。14には、肩部下の外面に斜行する押捺を伴う隆帯が貼付されるが、こうした装飾は当該文化層の調理用甕に一般的である。なお、14の外面には、垂直方向の白色線文がいくつか見られる。復元口径は、12が204mm、13が238mm、14が260mmである。

15~17はユニット6の埋納遺構出土土器である。15はおそらく1d群の水差しである。ロクロ成形で、胎土は普通から精良である。口縁部は欠損しているが、おそらくは長い頸部が直立していたと思われる。肩部には環状把手の痕跡が1箇所のみ認められる。内外面にはロクロナデが施され、外面下半には煤痕が一部残る。底部径107mm。16・17はおそらく6群の調理用甕であり、ほぼ完形で出土した。粘土紐と回転台を併せて用いて成形されていると思われ、胎土は粗製から普通である。16では、口縁部から頸部にかけての外面に水平

方向のナデが施されており、内面上半及び外面下半に煤痕が見られる。口径 112mm。17 では、外面にやや不規則な斜行及び水平方向のナデが施され、口縁部と胴部外面に煤痕が残る。復元口径 116mm。

2-5 ラバト第Ⅱ・Ⅲ層出土土器との比較

シャフリスタン地区第Ⅰ層下層のユニット床面・構築時整地から出土した土器の分析により、以下の2つの傾向が明らかになった。まず、土器群の分析から、1群、なかでも1a～1c群が多くを占めるということである。また、常に6群が一定数存在するという事も看過することができない傾向であった。さらに、器種に着目した場合、鉢がほとんど認められず、調理用甕と水差しが多数を占めるという顕著な傾向も看取された。検出されたユニットがいずれも通常の家屋として利用されていたと考えられることから、こうした傾向はカラハン朝時代の日常生活を反映していると捉えられるだろう。以下では、これらの分析結果を、ラバト地区第Ⅱ・Ⅲ層出土土器の傾向と比較する。

まず、ラバト地区第Ⅱ・Ⅲ層出土土器の土器群と比較してみよう。ラバト地区では、第Ⅱ層出土土器が24点、第Ⅲ層出土土器が35点と、定量分析に決して耐えうる出土数ではない。しかし、前者では1a群が、後者では造りがより丁寧な1c・1d群が最多を占めることは明らかであり、また、両層共に各4点の6群を含んでいる(城倉ほか2017:152、表4)。したがって、1a～1c群が最多数認められ、6群が一定数存在したシャフリスタン地区第Ⅰ層下層と傾向はほぼ一致している。ただし、シャフリスタン地区第Ⅰ層下層では、最も丁寧な造りの1d群が最も少なく、また、1d群が最も多く出土したのがユニット4構築時整地内であることを考慮して、当該文化層をラバト地区第Ⅱ層と第Ⅲ層の間に位置付けることもできるだろう。なお、ラバト地区第Ⅱ・Ⅲ層で見られた2～5・7～9群は、シャフリスタン地区第Ⅰ層下層からは一切認められていない。

次に、器種の出土傾向と個別型式を比較する。以前の論考では、ラバト地区出土土器の数量の制約から、器種の出土傾向に関する定量分析は行なっていない。しかし、鉢形は皆無、カップがおそらく2点であり、その他は壺・甕、水差し、調理用甕によりほとんど占められるようである。こうした傾向は、シャフリスタン地区第Ⅰ層下層とほぼ一致すると言える。それでは、土器型式を比較した場合はどうだろうか。正直なところ、ラバト地区第Ⅱ・Ⅲ層出土土器のうち図化に耐えうる資料があまりにも少ないため、個別の型式を比較することは難しい。比較的残りの良い水差しとカップ(城倉ほか2017:図5:1・3・6)に着目したが、水差しは口縁部の形態が異なっており(図3:11)、カップは底部から屈曲部にかけての輪郭は類似するが、環状把手の形態が異なる(図3:7・8)。したがって、型式学的観点から、ラバト地区第Ⅱ・Ⅲ層とシャフリスタン地区第Ⅰ層下層の出土土器は類似しているとは必ずしも言えない。

そこで、ラバト地区第Ⅲ層出土土器とシャフリスタン地区第Ⅰ層上層を比較すると、水差しの型式(口縁部の形態)に共通性が見られることがわかった(山内・アマンバエヴァ編2016:図4.28:15・16)。また、カップについても、型式が完全に一致するわけではないが、屈曲部の突出や環状把手の形態と取り付け方が類似している(山内・アマンバエヴァ編2016:図4.27:18)。他の器種において型式学的比較ができないため明確な結論には至らないが、少なくともラバト地区第Ⅲ層出土土器はシャフリスタン地区第Ⅰ層上層と部分的に文化的関係があると考えられる。

以上の比較分析結果を総合すると、ラバト地区第Ⅱ・Ⅲ層とシャフリスタン地区第Ⅰ層上・下層との関係に矛盾が生じることになる。すなわち、土器群を見た場合にはラバト地区第Ⅱ・Ⅲ層の間にシャフリスタン地区第Ⅰ層下層が位置付けられ、また、型式を見た場合にはラバト地区第Ⅲ層にシャフリスタン地区第Ⅰ層上層が対応する可能性がある。この場合、例え比較できる資料数が限られているとしても、形式的類似は決して無視できない事実なので、土器群の推移について再考するのが妥当と思われる。土器群の推移は、常に大多数を占める1群を基準に考えることができ、より丁寧な造りの1c・1d群が古い時期に多く、時期が下るにつれて比較的粗い造りの1a・1b群が増加すると推定してきた(城倉ほか2017)。確かに、この前提では、1a～1c類が多いシャフリスタン地区第Ⅰ層下層は1c・1d群が多いラバト地区第Ⅲ層と1a・1b群が多い同地区第Ⅱ層の間に位置付けられることになる。しかし、シャフリスタン地区第Ⅰ層下層を詳細に見ると、1a・1b群に比べて1c群がわずかに少ない。また、これらに比べてはるかに少ないが、より複雑な1d群もわずかに存在している。

こうした状況に鑑みると、1c群がより古くから存在し、少し時間をおいて1d群が卓越してくると捉えることもできる。また、1a・1b群は古い時期から作られていたが、1c・1d群の卓越に伴い減少に転じ、1c・1d群の衰退に伴って再び増加したと考えられる。上記の1群推移の推測に依れば、シャフリスタン地区第I層下層はラバト地区第III層よりも時間的に先行すると考えることができる。これにより、編年上の矛盾が解消されることになる。ここまで説明してきた層位関係を上層から以下にまとめておく。

- ①ラバト地区第II層。
- ②ラバト地区第III層＝シャフリスタン地区第I層上層。
- ③シャフリスタン地区第I層下層。

いずれにしても、本章の比較分析により、ラバト地区第II・III層がカラハン朝時代以降の文化層であることはほぼ明らかになったと言える。今後は、ラバト地区下層の第IV層の文化的位置付けについて、アク・ベシム遺跡ラバト地区における過去の発掘調査と周辺遺跡からの出土土器との比較分析から固めていく必要がある。

3. 瓦

3-1 計測と撮影の方法

2017年度に実施した整理作業では、早稲田大学文学部考古学コースが所持するクレアフォーム社のハンディスキャナー EXAScan、およびニコン D700 の写真機材をキルギスに持ち込み、計測・撮影を実施した。早稲田大学の三次元計測、デジタル撮影の方法論については、既に国内の調査報告書の中で詳述している（城倉編2017）ため、ここでは瓦の計測・撮影方法のみ整理しておく。

瓦に関しては、丸瓦・平瓦・道具瓦に分類可能だが、いずれも Surface 解像度 0.2mm に設定して計測を行った。計測時には、ターゲットシールを貼付した机の上に遺物を任意の傾きで設置し、遺物の高さに応じた黒色ウレタンターゲットを周囲に設置して、ノイズが出ないように計測を実施した。この方法であれば、遺物にシールを貼付することなく、ノイズの少ないデータを取得できる。その後、Geomagic control ソフトを使用して、遺物に関連しないノイズを除去し、表裏データのマージを行った上で、丸瓦・平瓦の想定される傾きを画面上で算出してワールド座標系へ整列した。最終的なデータは、OBJ データで出力し、Rilas 5号で報告した塼と同じパラメータで PEAKIT（尾根）処理を施し、PEAKIT ソフトで断面図を描出した。断面図については、三次元モデルを整列した状態で処理によって断面を描出しているため、通常の実測図とは異なり、断面位置を示した場所の最も薄い断面を示しているわけではない。三次元計測データの PEAKIT 実測図は、従来の拓本+断面のデータ提示方法とは大きく異なるが、デジタル写真と合わせて、遺物の客観的情報を提示することに主眼を置いている点を注意しておきたい。

一方、デジタル写真の撮影では、ガラスを用いた俯瞰撮影、および背景紙を用いた立面撮影を行った。撮影画像はグレーカードを用いて色を補正し、デジタル現像をして提示した。なお、デジタル写真は、PEAKIT 図面を図上で展開させたうえでスケールを調整している。

3-2 出土瓦の基礎情報

本論で報告する瓦は、2015年秋期のラバト中枢部の発掘調査出土品、および2015年の表採資料の2種類が含まれている。以下、資料の基礎情報について整理しておく。

まず、2015年出土品に関しては、Rilas Journal 4号紙上において、発掘成果を提示し、出土位置を明示している（城倉ほか2016）。第1トレンチ西区の城壁に伴う遺構面で検出された瓦塼類は、GroupA、B、Cに分類した。また、城壁の断ち割りで確認した瓦塼の集積遺構を、GroupDとした。さらに、A、B、C、Dをブロック毎に細分して名称を付与して取り上げた（城倉ほか2016：p25、図12）。以上の情報を基に、注記番号を設定した（表4）。ABはAk-Beshim遺跡、2015Autは2015年秋期調査を意味し、A・B・C・Dの番号は出土グループを示す。最後にRoof Tileの略称rt1～62の通し番号を付けて、実測・撮影個体を抽出した。最終段階

でrt53、rt59、rt61が接合したため、rt53以外を欠番とした。

次に、2015年秋期にラバトで実施した表採資料についても言及しておく。ラバトでは、①中枢部グリッド、②水路グリッド、③仏教寺院グリッドを設定して、表採を実施した。この表採品の中で、特に重要な資料のみをピックアップして実測・撮影の対象とした。注記番号に関しては、Area2ndSが、キルギス側の呼称でのラバト（セカンドシャプリスタン）中枢部、BTがBuddist Templeすなわち仏教寺院を意味し、英数字は表採地点を示す（城倉ほか2017:p7、図2）。なお、sfcはSurface Collection、すなわち表採品である点を示す。ピックアップ品に関しては、最終的なrtの通し番号を付与し出土品と一緒に報告を行った。

以上の基礎情報を踏まえて、表4には全分析個体の観察表、図4には製作技法を示す写真、図5にはPEAKIT実測図、図6にはデジタル写真をそれぞれ提示した。なお、今回のピックアップ品に関しては、まず数量の圧倒的に少ない丸瓦、軒丸瓦を全て抽出した後、広端・狭端、および両側縁のいずれかが残存している平瓦の中で重要な資料を抽出した。A地点が15個体、B地点が10個体、C地点が1個体、D地点が25個体で、城壁断ち割り部分の集積遺構からの抽出品が多くを占める。表採品は、丸瓦を中心に9個体抽出した。ちなみに、A～C地点の資料は相互に接合関係が認められる資料があり、城壁断ち割り部分出土品も、法量・焼成状況・技法などが完全に一致するため、今回の報告品は極めて近い限られた年代幅におさまる資料群であると考えている。なお、本論では発掘調査の概報という特性上、あえて現段階の整理番号順に遺物を提示した。また、PEAKIT図版と写真は、紙幅の都合もあるため、個体の大きさに合わせて前後を入れ替えて提示している。さらに、欠番やデータ取得ミス個体（rt39）も、除外していない。今後の正報告書刊行に向けて、速報性を重視しつつ情報の混乱を避けるための方策である点を明記しておく。

3-3 製作技法と観察表・実測図・写真の提示

本論では紙幅の都合上、瓦の詳細な分析や系譜・年代的な位置づけなどは省略せざるを得ない。そのため、資料化対象とした全個体のPEAKIT実測図、および写真の提示を主目的とし、図5・6に4分の1に統一した実測図と写真を32頁分提示した。従来の瓦の実測図の提示方法としては、拓本と断面図を組み合わせたものが一般的だが、今回は三次元計測したデータを画像処理した上で6面展開し、断面図を提示している。グレーカードを用いて色調補正を行ったデジタル写真も、同じ縮尺に統一して提示した。以上は、日本国内の人物埴輪の資料提示の中で示した方法論（城倉編2017）を応用したもので、PEAKIT実測図とデジタル写真から読み取れる情報は非常に多いと考えている。

その上で、各個体の基本情報と凹凸面に残る痕跡を列挙する形で表4に観察表を提示した。前述したように本報告資料は、ほぼ同じ層位から出土した共通性の高い資料群で、表採品を含めても年代的な幅は非常に狭い。この点は、ラバトの造営と利用が唐代の極めて限られた時間幅の中におさまることを意味する。もちろん、複数地点の発掘品の比較などにより、遺構の性質や年代幅などを考察していく必要はあるが、今回はラバト中枢部の東城壁付近の極めて狭いエリアの出土品の特徴をまとめている点は確認しておきたい。以上の資料的な制約を踏まえた上で、今回は出土瓦を平瓦・丸瓦・道具瓦に大きく分類し、それぞれの技法的な特徴を図3・4を基に整理する。なお、中央アジアや中国西域の瓦を体系的にまとめた論考などは、現段階では存在していない。そのため、東アジアを中心とした瓦の研究成果（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所2010など）を応用しつつ、製作技法についてまとめることにする。また、名称については近年の入門書などを参照しつつ（有吉編2018）、平瓦については佐原眞、丸瓦については大脇潔の研究（佐原1972、大脇1991・2018）を参考に整理する。

【平瓦の製作技法】

平瓦は、城壁断ち割り部分のGroupDから出土した個体に完形品を含む残存度が高い個体が多くあり、全体像が判明している。なお、広端面に波状文や波状重弧文を施すなどの明確な軒平瓦の存在は、破片でも確認できていない。すべてが通有の平瓦である。平瓦は、有柄開閉式桶を用いた粘土紐桶巻き作りによって製作されていると考える。

表 4 ラバト 2015 年出土土瓦の観察表①

注記番号	種別	凹面	凸面	広端	狭端	左側縁	右側縁	焼成	色調	重量
AB_2015Aut_A10_rt1	丸瓦	布目	板オサエ	—	—	ナデ	—	良好	Hue2.5Y7/1	256g
AB_2015Aut_A11_rt2	丸瓦	布目	ヨコナデ	—	—	ナデ	—	良好	Hue2.5Y7/1	209g
AB_2015Aut_D9_rt3	平瓦	布目、綴じ合わせ目、側板痕、粘土紐、分割截線	輪積み痕、板オサエ	ケズリ・条痕	—	界点下	界点下	良好	Hue2.5Y7/2	1408g
AB_2015Aut_D5_rt4	平瓦	布目、重複部分、粘土紐	ロクロ、板オサエ、タタキ	ケズリ・条痕	—	界点上・下	界点上・下	良好	Hue2.5Y7/1	1472g
AB_2015Aut_D2_rt5	平瓦	布目、側板痕	ヨコナデ、粘土紐、板オサエ	ケズリ	—	界点下	界点下	良好	Hue2.7Y7/1	1260g
AB_2015Aut_D8_rt6	平瓦	布目、綴じ合わせ目、側板痕、粘土紐	板オサエ、タタキ	ケズリ・条痕	—	界点下	—	良好	Hue2.5Y6/2	1219g
AB_2015Aut_D7_rt7	平瓦	布目、断続圧痕、側板痕、粘土紐	ヨコナデ、板オサエ	ケズリ	—	界点下	—	良好	Hue2.5Y7/1	1336g
AB_2015Aut_D7_rt8	平瓦	布目	ヨコナデ、板オサエ	ケズリ	—	界点下	界点下	良好	Hue2.5Y7/1	1067g
AB_2015Aut_D4_rt9	平瓦	布目、側板痕	ヨコナデ、板オサエ	ケズリ・条痕	—	界点下	界点下	良好	Hue2.5Y	1092g
AB_2015Aut_D5_rt10	平瓦	布目、補修痕、側板痕、粘土紐	ヨコナデ、板オサエ	ケズリ	—	界点下	界点下	不良	Hue2.5Y7/3	1210g
AB_2015Aut_D3_rt11	平瓦	布目、分割截線、粘土紐	ヨコナデ、板オサエ、粘土紐	ケズリ	—	界点下	界点下	良好	Hue2.5Y7/1	1382g
AB_2015Aut_D1_rt12	平瓦	布目、重複、分割截線、側板痕、粘土紐	タタキ	ケズリ・条痕	—	界点なし	界点なし	不良	Hue2.5YR6/2	1014g
AB_2015Aut_D1_rt13	平瓦	布目、断続圧痕、粘土紐	粘土紐	ケズリ	—	界点上・下	界点下	良好	Hue2.5Y7/1	1222g
AB_2015Aut_D6_rt14	平瓦	布目、粘土紐	ヨコナデ、板オサエ	ケズリ・条痕	—	界点下	—	良好	Hue2.5Y7/2	775g
AB_2015Aut_D4_rt15	平瓦	布目、糸綴じと重複、側板痕	ヨコナデ、板オサエ	ケズリ・条痕	—	界点下	界点下	良好	Hue2.5Y7/2	851g
AB_2015Aut_B2_rt16	平瓦	布目、側板痕、粘土紐	ヨコナデ、板オサエ	ケズリ・条痕	—	界点下	界点下	良好	Hue2.5Y7/2	582g
AB_2015Aut_D10_rt17	平瓦	布目、糸綴じ、側板痕	ヨコナデ、板オサエ	ケズリ・条痕	—	界点下	—	不良	Hue2.5Y7/3	723g
AB_2015Aut_B2_rt18	平瓦	布目、綴じ合わせ目、側板痕	ヨコナデ、板オサエ、タタキ	ケズリ・条痕	—	界点下	界点下	良好	Hue2.5Y7/1	528g
AB_2015Aut_D9_rt19	平瓦	布目、分割截線	ヨコナデ	ケズリ	—	界点下	—	良好	Hue2.5Y6/3	457g
AB_2015Aut_B2_rt20	平瓦	布目	ヨコナデ、板オサエ	ケズリ	—	界点下	—	良好	Hue2.5Y7/1	420g
AB_2015Aut_D9_rt21	平瓦	布目、側板痕、粘土紐	ヨコナデ、板オサエ	ケズリ	—	界点下	界点下	良好	Hue2.5Y7/2	566g
AB_2015Aut_D6_rt22	道具瓦	布目、粘土紐、4×3分割	ヨコナデ	ケズリ・条痕	—	界点下	界点下	良好	Hue2.5Y7/2	579g
AB_2015Aut_D9_rt23	道具瓦	布目、側板痕、4×3分割	ヨコナデ	ケズリ	—	界点下	界点下	良好	Hue2.5Y7/2	513g
AB_2015Aut_B2_rt24	平瓦	布目	ヨコナデ	ケズリ・条痕	—	—	—	良好	Hue2.5Y7/2	492g
AB_2015Aut_B2_rt25	平瓦	布目、粘土紐	ヨコナデ	ケズリ	—	界点下	界点下	良好	Hue2.5Y7/1	399g
AB_2015Aut_B2_rt26	平瓦	布目	タタキ	ケズリ	—	界点なし	界点なし	良好	Hue2.5Y5/1	362g
AB_2015Aut_B2_rt27	平瓦	布目	ヨコナデ、粘土紐	ケズリ	—	界点下	界点下	良好	Hue2.5Y7/2	232g
AB_2015Aut_A11_rt28	平瓦	布目、補修痕、側板痕、粘土紐	ヨコナデ、板オサエ	ケズリ・条痕	—	界点なし	界点なし	良好	Hue2.5Y6/1	363g
AB_2015Aut_D7_rt29	平瓦	布目、側板痕、粘土紐	ヨコナデ、板オサエ	—	ナデ	—	界点なし	良好	Hue2.5Y6/1	855g
AB_2015Aut_D9_rt30	平瓦	布目、側板痕、粘土紐	ヨコナデ、板オサエ	—	ナデ	—	界点なし	不良	Hue7.5YR7/2	730g
AB_2015Aut_D3_rt31	平瓦	布目、綴じ合わせ目、側板痕、粘土紐、分割截線	ヨコナデ、板オサエ	—	ナデ	界点なし	—	良好	Hue2.5Y7/3	904g
AB_2015Aut_D8_rt32	平瓦	布目、側板痕	ヨコナデ、板オサエ	—	ナデ	界点上	—	良好	Hue2.5Y7/2	1033g
AB_2015Aut_A10_rt33	平瓦	布目、補修痕、綴じ合わせ目、側板痕	ヨコナデ、粘土紐	—	ナデ	界点上	—	良好	Hue2.5Y7/2	729g
AB_2015Aut_B2_rt34	平瓦	布目、布のよじれと綴じ合わせ目、側板痕	ヨコナデ	—	ナデ	界点上	界点上	良好	Hue2.5Y6/1	600g
AB_2015Aut_D9_rt35	平瓦	布目	ヨコナデ	—	ナデ	界点上	—	良好	Hue2.5Y7/2	642g
AB_2015Aut_B2_rt36	平瓦	布目、粘土紐	ヨコナデ、タタキ	—	—	—	界点なし	不良	Hue2.5YR6/2	379g
AB_2015Aut_D3_rt37	道具瓦	布目、4×3分割	ヨコナデ	—	ナデ	—	界点上	良好	Hue2.5Y7/1	430g
AB_2015Aut_D9_rt38	平瓦	布目	ヨコナデ	—	ナデ	—	界点上	良好	Hue2.5Y7/2	189g
AB_2015Aut_B2_rt39	平瓦	布目、分割截線、側板痕	ヨコナデ	—	ナデ	界点下	—	良好	Hue2.5Y	222g
AB_2015Aut_A11_rt40	平瓦	布目	ヨコナデ	—	ナデ	界点上	—	良好	Hue2.5Y6/2	221g

表4 ラバト 2015 年出土瓦の観察表②

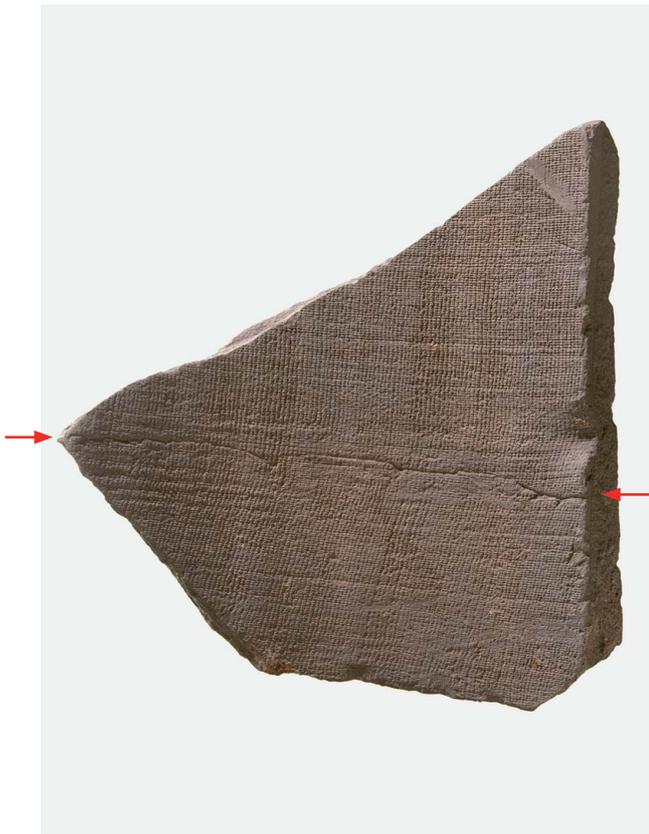
注記番号	種別	凹面	凸面	広端	狭端	左側縁	右側縁	焼成	色調	重量
AB_2015Aut_Area2ndS_2B_sfc_rt41	軒丸瓦	ナデ	外区珠文帯(蓮華文瓦当か?)	—	—	—	—	良好	Hue2.5Y6/1	37g
AB_2015Aut_AreaBT_G05_sfc_rt42	玉縁	布目、縦じ合わせ目、粘土紐	ヨコナデ	—	ナデ	破面	破面	良好	Hue2.5Y6/1	256g
AB_2015Aut_AreaBT_F03_sfc_rt43	玉縁	布目、縦じ合わせ目	ヨコナデ、板オサエ	—	—	破面	—	良好	Hue2.5Y6/1	166g
AB_2015Aut_Area2ndS_sfc_rt44	玉縁	布目、粘土紐	板オサエ	—	ナデ	—	—	良好	Hue2.5Y6/1	271g
AB_2015Aut_Area2ndS_3A_sfc_rt45	玉縁	布目、縦じ合わせ目、粘土紐	ヨコナデ、板オサエ	—	ナデ	—	—	良好	Hue2.5Y6/2	339g
AB_2015Aut_Area2ndS_4B_sfc_rt46	玉縁	布目	ヨコナデ、タタキ	—	—	—	破面	良好	Hue2.5Y6/1	220g
AB_2015Aut_A8_rt47	不明	布目、粘土紐	(突帯状粘土に切り込みの装飾)	—	—	—	—	良好	Hue5YR6/4	1075g
AB_2015Aut_AreaBT_F03_sfc_rt48	平瓦	布目、破れた箇所、側板痕、粘土紐	ヨコナデ、板オサエ、タタキ	ケズリ	—	界点下	—	良好	Hue2.5Y7/1	260g
AB_2015Aut_A8_rt49	平瓦	布目、側板痕、粘土紐	ヨコナデ、粘土紐、板オサエ、タタキ	ケズリ・条痕	—	界点下	—	不良	Hue2.5Y7/1	1225g
AB_2015Aut_C7_rt50	平瓦	布目、縦じ合わせ目、側板痕、粘土紐	ヨコナデ、板オサエ、タタキ	—	ナデ	界点なし	—	良好	Hue2.5Y7/2	968g
AB_2015Aut_A8_rt51	平瓦	布目、分割截線、側板痕、粘土紐	ヨコナデ、タタキ	ケズリ・条痕	—	界点下	界点下	良好	Hue2.5Y6/1	1027g
AB_2015Aut_A8_rt52	平瓦	布目、破れた箇所、側板痕、粘土紐	ヨコナデ、板オサエ	ケズリ・条痕	—	界点下	界点下	良好	Hue2.5Y6/2	1048g
AB_2015Aut_A8_rt53	平瓦	布目、縦じ合わせ目、側板痕	ヨコナデ、板オサエ	—	—	界点下	界点下	不良	Hue7.5YR7/2	884g
AB_2015Aut_A8_rt54	平瓦	布目、縦じ合わせ目、側板痕	ヨコナデ、板オサエ	—	ナデ	—	界点下	不良	Hue2.5Y7/2	337g
AB_2015Aut_A8_rt55	平瓦	布目、側板痕	板オサエ、粘土紐	—	—	界点なし	—	不良	Hue2.5Y6/2	383g
AB_2015Aut_A8_rt56	平瓦	布目、分割截線、側板痕、粘土紐	板オサエ	—	—	—	界点なし	良好	Hue2.5Y7/1	396g
AB_2015Aut_A8_rt57	平瓦	布目、縦じ合わせ目、	ヨコナデ	ケズリ	—	—	界点下	良好	Hue2.5Y7/1	429g
AB_2015Aut_Area2ndS_3A_sfc_rt58	平瓦	布目、縦じ合わせ目	ヨコナデ、板オサエ	—	—	—	界点なし	良好	Hue2.5Y7/1	256g
rt59はrt53と接合して欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
AB_2015Aut_A8_rt60	平瓦	布目、粘土紐	ヨコナデ、板オサエ	ケズリ	—	界点なし	—	良好	Hue2.5Y7/2	165g
rt61はrt53と接合して欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
AB_Aut2015_AreaBT_D01_sfc_rt62	道具瓦	布目、4×3分割	ヨコナデ、粘土紐	—	—	—	界点なし	良好	Hue2.5Y7/1	64g

※本論は概報のため、現段階の暫定的なデータを整理番号順に提示した。種別毎の詳細データは、正報告書で示す予定である。

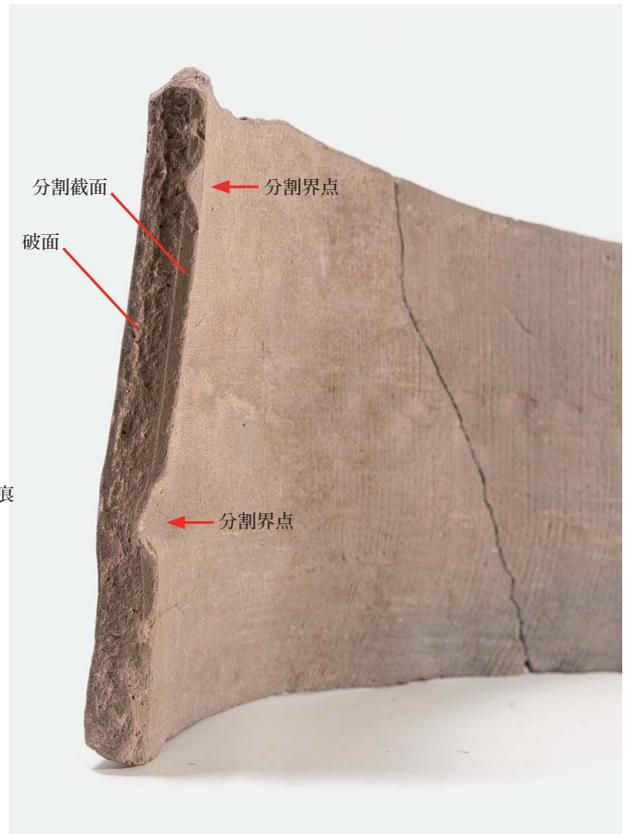
※注記番号は、表採資料を赤、欠番個体を緑のトーンで示している。種別の平瓦以外は、オレンジトーンで示した。

※広端は刀子による切り離しの際のケズリ、および砂粒の引き摺り条痕の有無を記載した。狭端はナデの有無を記載した。

※凹面を上にした時の左右で側縁を記載している。丸瓦は側面の調整、平瓦は分割界点の場所と数を明示した。「—」は、残存していない点を示す。



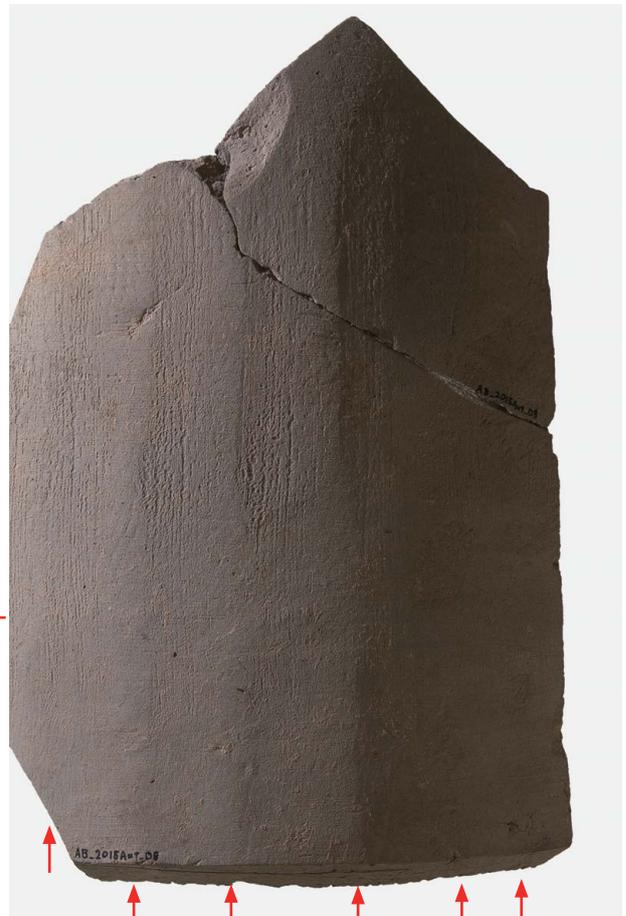
凹面に残る左上がりの粘土紐の接合痕跡 (rt16)



上下2段の分割界点と分割界面・破面 (rt13)



全面に横方向の回転ナデ (rt14)



凸面に残る板オサエの痕跡 (rt6)

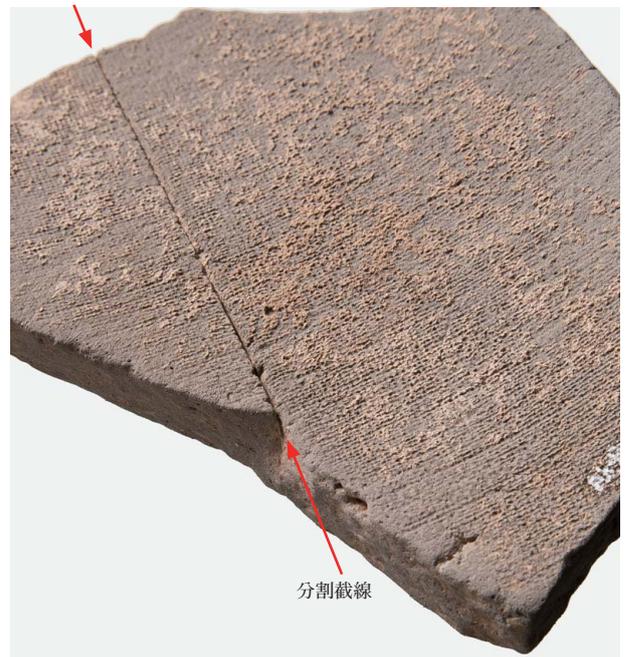
図4 瓦の製作技法①



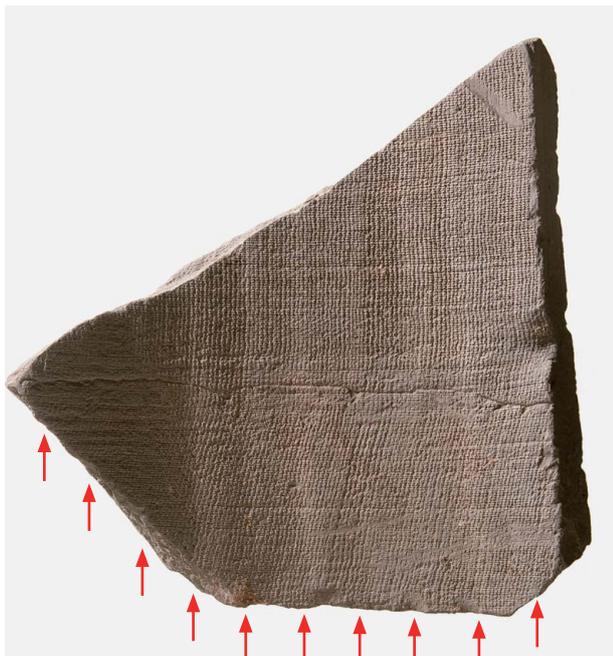
広端縁に残るケズリ痕跡 (rt4)



凹面に残る粘土紐と断続的な圧痕 (rt13)



4分割後の3分割截線 (rt56)



凹面に残る側板痕跡 (rt16)



狭端縁のユビナデ痕跡 (rt29)

図4 瓦の製作技法②



布の重複部分 (rt4)



破れた布の痕跡 (rt52)



布の補修痕跡 (rt10)



布の綴じ合わせ目 (rt17)



丸瓦玉縁部分の成形技法 (rt42)

図4 瓦の製作技法③

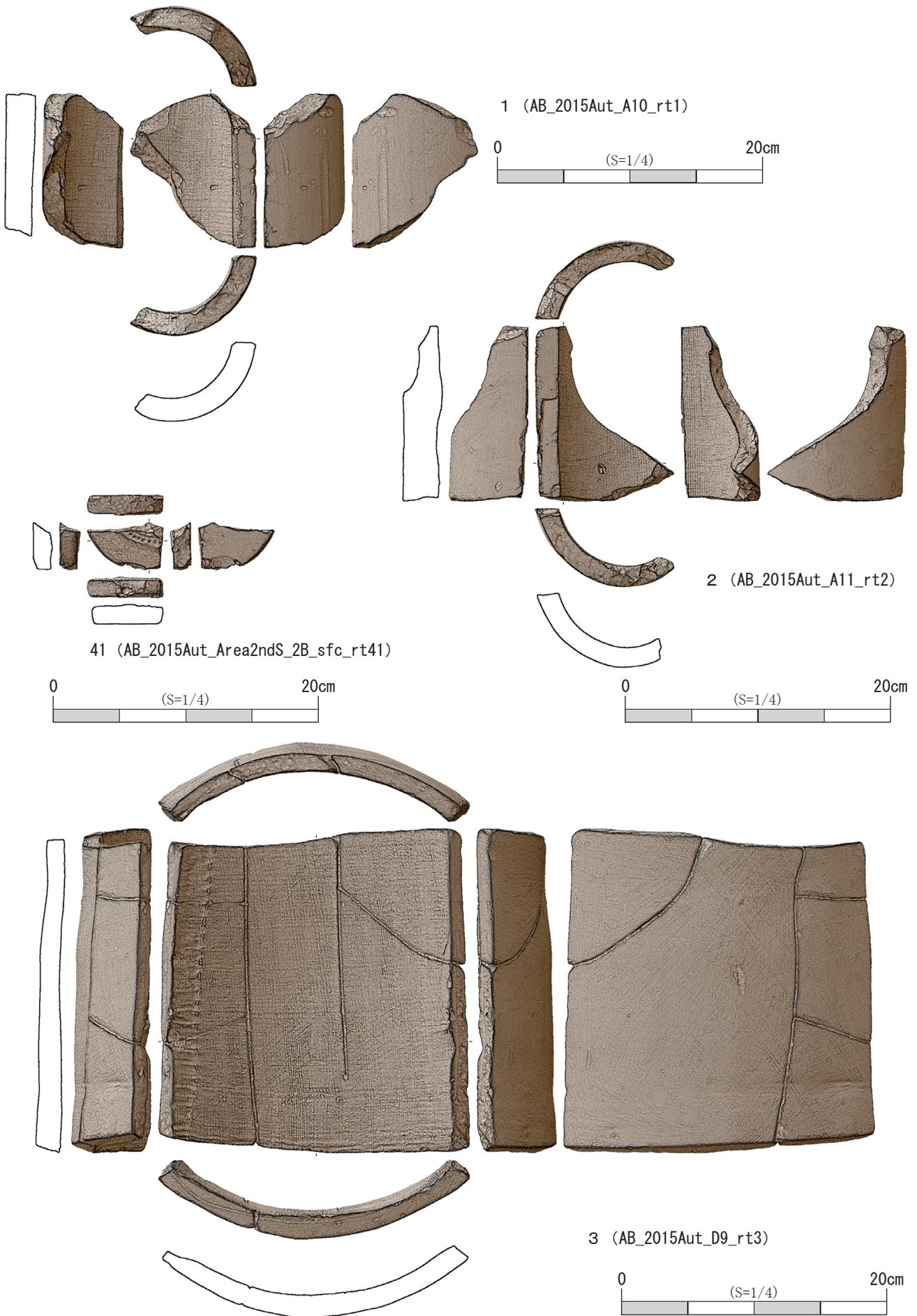
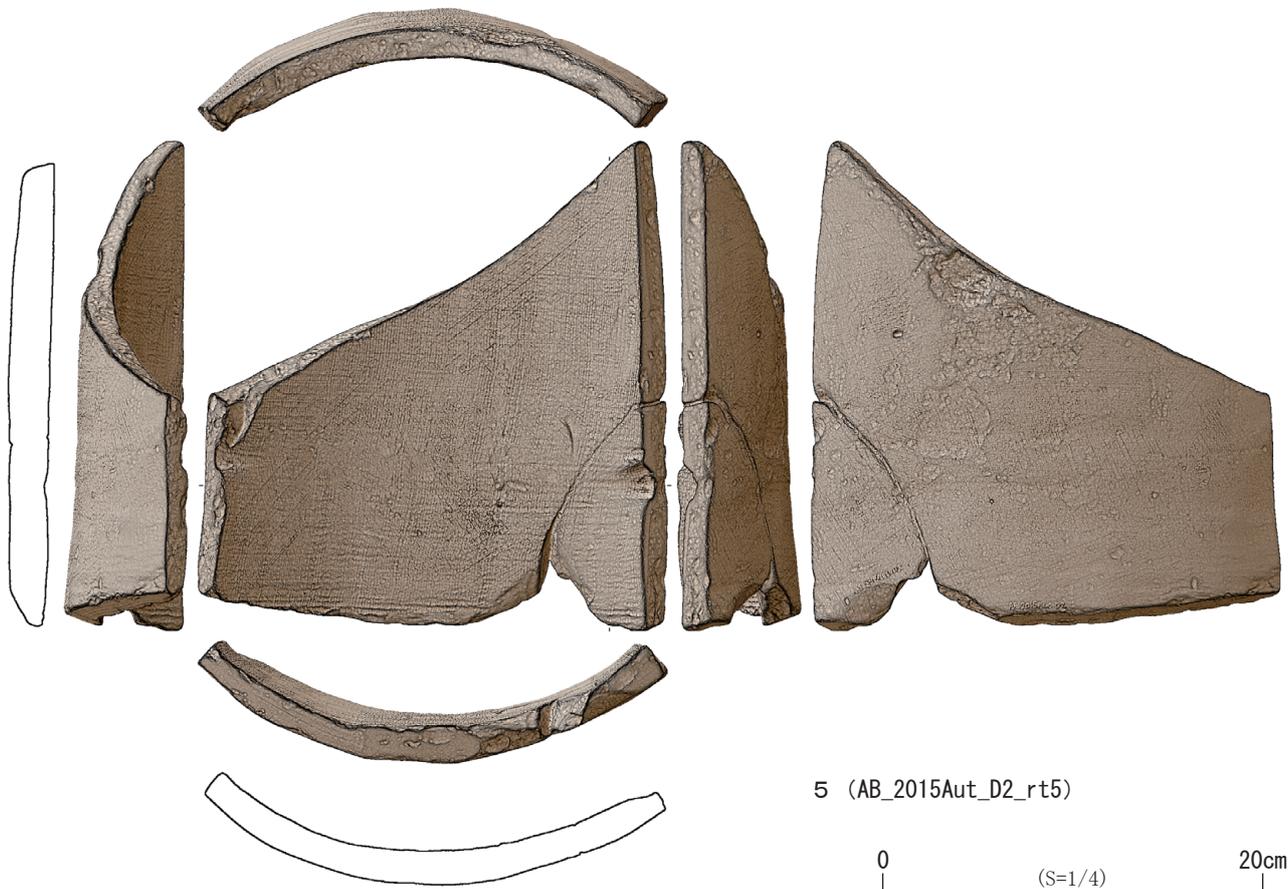
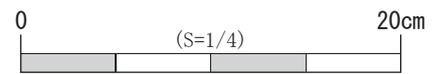


図5 出土瓦のPEAKIT①



4 (AB_2015Aut_D5_rt4)



5 (AB_2015Aut_D2_rt5)

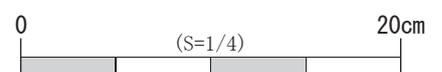
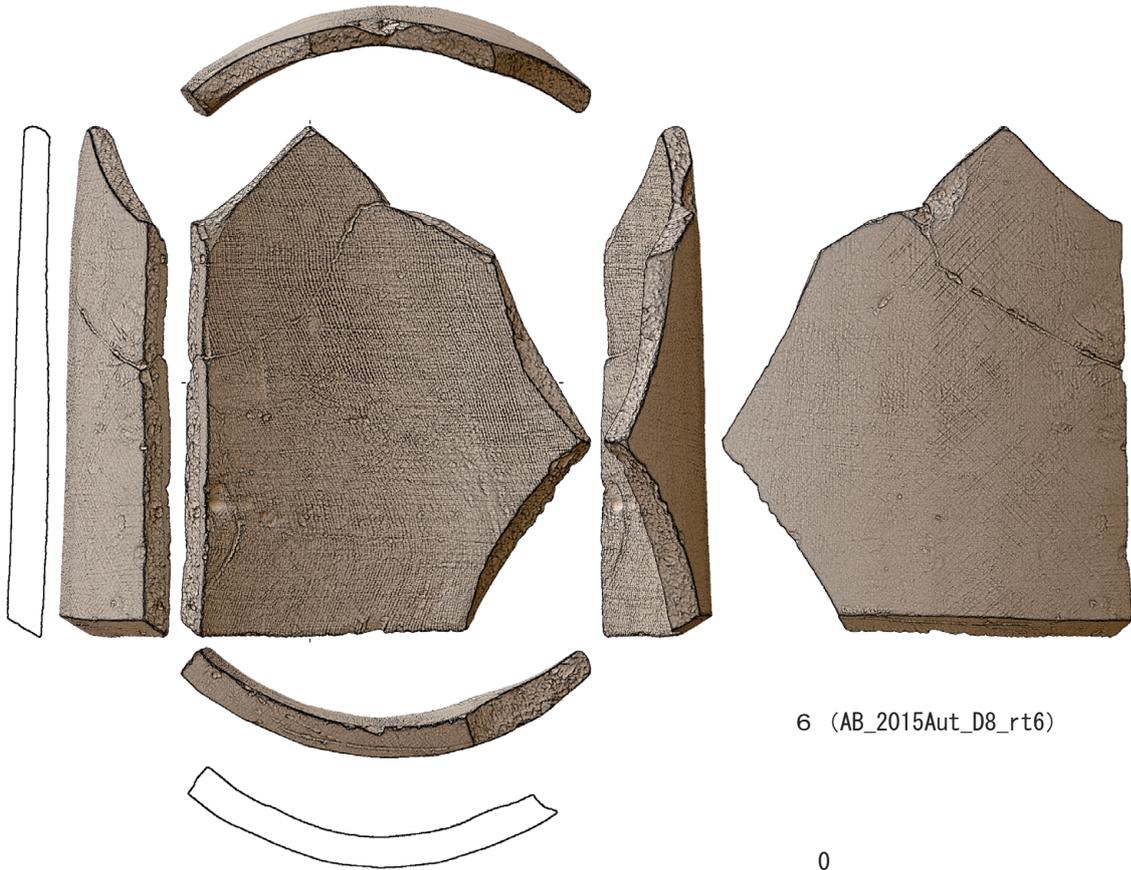
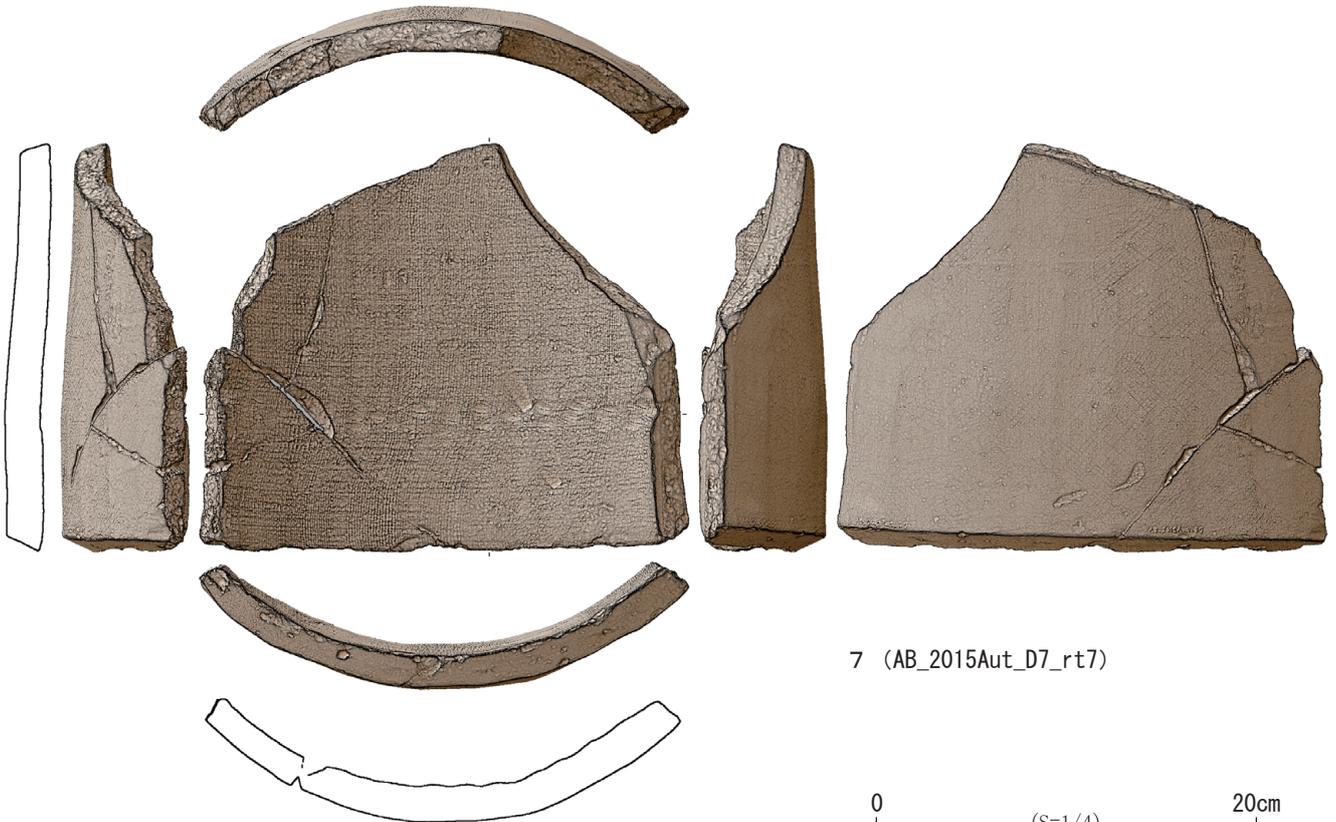


図5 出土瓦のPEAKIT②



6 (AB_2015Aut_D8_rt6)

0 (S=1/4) 20cm



7 (AB_2015Aut_D7_rt7)

0 (S=1/4) 20cm

図5 出土瓦のPEAKIT③

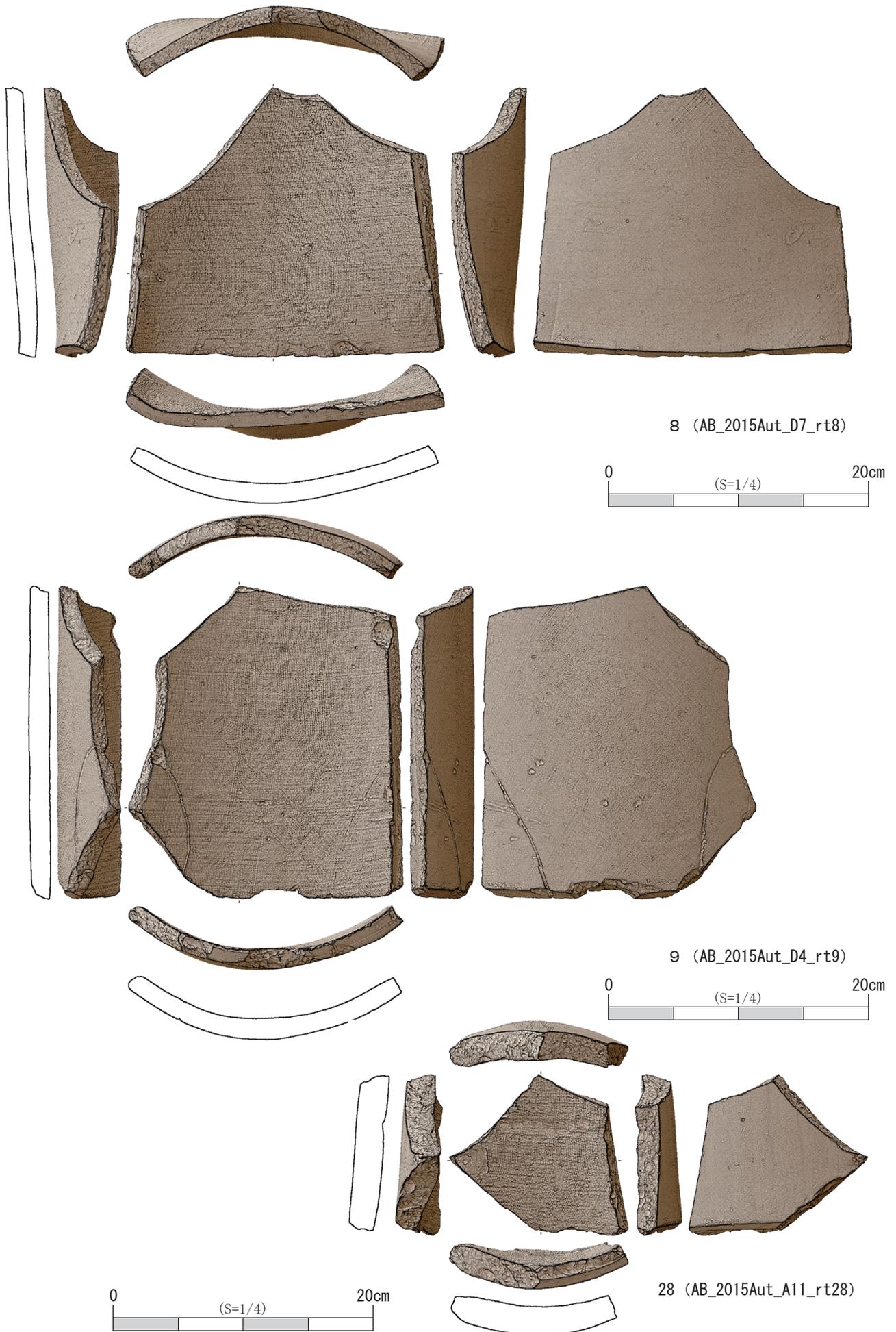
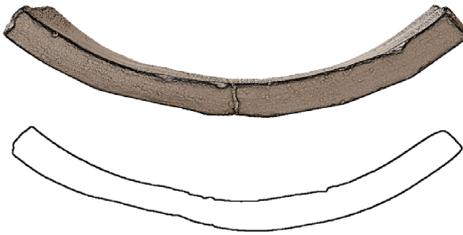
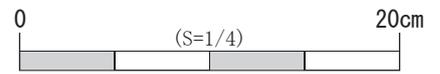


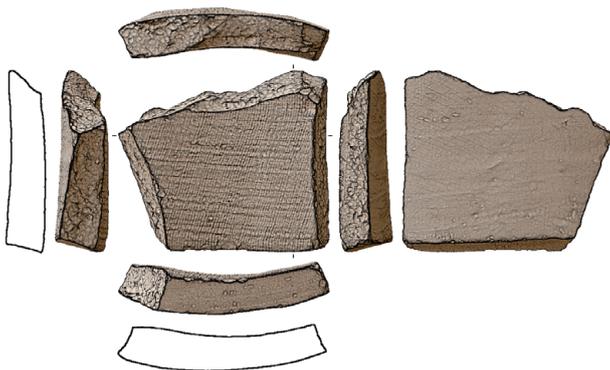
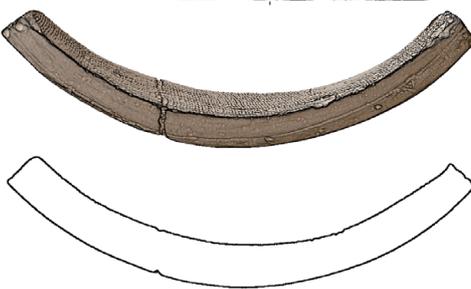
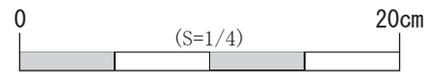
図5 出土瓦のPEAKIT④



10 (AB_2015Aut_D5_rt10)



11 (AB_2015Aut_D3_rt11)



27 (AB_2015Aut_B2_rt27)

